

むかし、あるところに、母親と息子のふたり暮らしがありました。山でたきぎを取ってきて、わずかなお金に換え、お米を買って暮らしていました。

あるとき、息子が、母親にいました。

「おかあさん。明日は、弁当をこしらえてくれないか」

「弁当なんてこしらえてどうするんだ」

「一日働いて、たきぎをうんと集めて、お金をたくさんもうけたいんだ」

あくる日、息子は、弁当をこしらえてもらって、山に行きました。そして、弁当を木の枝にかけておいて、一生懸命木を切りはじめました。しばらくすると、どこから来たのか、口は耳までさけて、目は朝日のように光った男の人がやって来て、息子の弁当を、すばすばあつと食べてしまいました。息子は、ものもいえずに見ていました。男の人は、「おまえは、明日もまた山へ来るだろうが、こんどはこの山のとっぺんに来い。福をさずけてやるから」といって、どこかへ行ってしまいました。

息子は、弁当を食べられてお腹もすくので、家に帰りました。母親は、

「おや。今日は、一日働くといっていたのに、もう帰って来たのかい」といいました。

息子は、

「それが、木を切っていたら、口は耳までさけて、目は朝日のように光った男の人がやって来て、弁当を食べてしまったんだ。明日山のとっぺんまで来たら福をさずけてくれるといったから、行って来る」といいました。

つぎの日、息子は、朝早く起きて、約束どおり山を登って行きました。

とっぺんまで行く途中に、りっぱな茶屋が二軒ありました。息子は、はじめの茶屋によつて、

「ごめんください」と声をかけました。すると、主人が出てきて、

「おまえさん、どこへ行くんだい」とたずねました。息子が、

「きのう、木を切っていたら、口は耳までさけて、目は朝日のように光った男の人がやって来て、山のとっぺんまで来たら福をさずけてくれるといったのです。それで、登ってきました」というと、主人はいました。

「それは、きつと、山神さまだ。ひとつ言伝を頼まれてくれないか」

「わたしにできることなら」

「じつは、この庭の木は金なる木なんだが、今年はつぼみもつかないし花も咲かない。どういうわけなのか、たずねてきてくれ」

「はい。分かりました」

息子はそういって、先へ登っていきました。

もう一軒の茶屋まで来ると、家の人たちが泣いたり叫んだりしていました。

「ごめんください。何のさわざですか」

「じつは、天にも地にもないひとり娘が、明日をも知れない病にかかっているのだ。ところで、おまえさんは、どこへ行くんだい」

「きのう、木を切っていたら、口は耳までさけて、目は朝日のように光った男の人がやって来て、山のてっぺんまで来たら福をさずけてくれるといったので、登ってきました」というと、主人はいいました。

「それなら、ひとつ言伝を頼まれてくれないか」

「わたしにできることなら」

「では、娘の病のわけを、たずねてきてくれ」

「わかりました。たやすいことです」

息子は、山のてっぺんまで登っていきました。すると、大きな屋敷がありました。

「ごめんください」と、声をかけると、中から、昨日の山神さまが出てきて、

「おそかったなあ。さあ、早く座敷に上がれ」といいました。足を洗って、座敷に上がると、山神さまは、お盆にお茶を持ってきてくれました。それから、奥から大きな台を出してきて、ぎやあぎやあ泣いている赤ん坊を台に乗せ、頭からつま先まで輪切りにして、胴のところを菓子盆に入れて息子の前に置きました。

「さあ、お食べ」

息子が、驚いて後ずさりすると、山神さまは、

「えんりよはいらん、食え、食え」といいます。息子がおそろおそろ食べてみると、何ともいえずおいしいお菓子でした。山神さまが、

「これは、ナツゴ菓子というて、世にもめずらしい菓子だ」というので、息子は、（人間の子なら、こんな味のはずがない）と思って、ふた切れ、三切れ食べると、おなががいっぱいになりました。

息子は、下の茶屋で頼まれたことをたずねてみました。

「金のなる木に、今年はずぼみもつかないし花も咲かないのは、どういうわけなのでしょう」

山神さまは、

「それは、その木の北の方に、貧乏根が張っているからだ。その根を切ってしまえば、すれば、今日からでも金になる」といいました。

つぎに息子は、上の茶屋で頼まれたことをたずねました。

「上の茶屋の娘さんが、明日をも知れない病にかかっています。どうすれば治るでしょう」

「それは、その家を建てる時、柿の柱と礎の間に、あおがえるをつぶしてしまった。それが今は紙のようになってる。その思いが娘にかかっているのだ。かえるを助けてやれば娘の病はすぐに治る」

山神さまは、そういうと、あとは何もいわず、食えとも飲めとも、語れともいわないので、息子は、

「きのう、福をやるとおっしゃったので、登って来たのですが」とたずねました。山神さまは、

「ああ。おまえにやる福は、それ以上のものはない」と答えました。そのとたん、いきなり屋敷ががらーっと消えてなくなりました。山神さまも、どこへ行ったか分からなく

なりました。

息子は山を下りて行きました。上の茶屋まで来ると、主人が、今か今かと待ちかねていました。

「どういふ話だったかい」

「この家を建てる時、柿の柱と礎の間に、あおがえるをつぶしてしまったそうです。それが今は紙のようになっていいる。その思いが娘にかかっているからだ。かえるを助けてやれば娘の病はすぐに治ると、山神さまはおっしゃいました」

主人は、話も終わらないうちに、のこぎりで柿の柱を切りました。すると、かえるが紙のようになっていたので、薬を飲ませると、かえるは、みじみじと足を動かし、手を動かししました。すると、娘が目を開けました。かえるがひと跳び、二跳びして外へ出て行くと、娘は頭をまくらから上げ、ご飯を食べました。主人は、息子に、

「あなたは娘の命の恩人だから、どうか、このうちの跡継ぎになってくれ」といいました。息子は、

「わたしは、家に七十を過ぎた母が待っています。母にきいてきます」といって、山を下りて行きました。

下の茶屋まで来ると、やっぱり主人が待ちかねていました。

「どういふ話だったかい」

「木の北の方に、貧乏根が張っている。それを切ってしまえば、今日からでも金になると、山神さまはおっしゃいました」

主人がさつそく木の根元を掘ると、貧乏根がありました。それを切ったところ、すぐに木につぼみがつきました。主人は、息子に、

「あなたのおかげです。どうか、このうちの跡継ぎになってくれ」といいました。

「わたしは、家に七十を過ぎた母が待っています。母にきいてきます」

息子はそういって、家に帰って行きました。

しばらくすると、上の茶屋から、息子の所に、迎えのかが来ました。

「あなたは娘の命の恩人だから、どうか、うちの跡を継いでくれ」

下の茶屋からも、迎えのかが来ました。

「あなたは金ならん木をならせるようにしてくれたから、どうか、うちの跡を継いでくれ」

二軒の主人は、いい争いになってしまいました。息子がこまっていると、どこから来たのか、ひとりの人が、

「わしが仲裁してやろう。ひと月のうち、上の十五日は上の茶屋、下の十五日は下の茶屋の跡継ぎになるといい」といいました。そこで、そのとおりになりました。

息子は、二軒の家の跡継ぎになって、母親もいっしょに、幸せに暮らしたということです。

おしまい

